

## ■ 書 評



### 非定型精神病とカタトニア —拒絶と服従から学ぶ症候学—

中山和彦 著

星和書店

2016年5月 244頁

本体価格 3,700円＋税

本書は、東京慈恵会医科大学教授である中山和彦先生が定年退任を記念して書かれたものである。読み終えて中山先生の良い意味で緻密で強迫的な性格が伝わる良書であり、先生のライフワークである非定型精神病に関する長い研究の集大成として是非、皆さんに読んで頂きたいと思い紹介させて頂くことにした。

中山和彦先生は、在任中に日本生物学的精神医学会、日本神経精神薬理学会、リチウム研究会などで活躍されていたので精神医学を生物学的な側面から研究されている先生とばかり思っていたが、月経関連症候群の研究を含めて生物学的知見だけでなく、性、カールバウムなどの精神病理学への理解、病跡学への造詣の深さ、さらにはスピリチュアルケアを含めた包括的な精神医学の考え方を通して非定型精神病とカタトニアを区別されようと研究を進められてきたことを知って驚嘆した。

非定型精神病の臨床経過について、発病準備状態、病前性格、発症にかかわる直接の心身両面にわたる過剰なストレス、前駆期、前兆、発病初期、急性精神病期、鎮静期、精神病後抑うつ、寛解期に分けて述べ、非定型精神病は女性、カタトニアは男性中心の疾患であること、非定型精神病からは症候学の重要性、症状の極性、周期性などを理解することが重要であることを指摘されている。さらに再発に関して、先生の専門ともいべき患者・家族の感情表出について章立てがなされている。

満田の非定型精神病との異同については本書では触れられておらず、先生がどう考えられているか

知りたいと思ったが、非定型精神病は、振動、波動、周期性の脳科学の一分野として、双極性障害、強直間代性けいれんを含めて考えるべきであること、特に自験例、カールバウムの症例報告からは、けいれんと熱情的な恍惚症をあげ、カタトニアではけいれん、非定型精神病では熱情的な恍惚症が主軸になるのではないかと、女性性が振動、波動を操作する力となっており、性周期がカタトニアへの移行をむしろ阻止するための防衛機制として働いているのではないかと仮説を繰り返して述べられている。また非定型精神病は、ここで表現した防衛、カタトニアは身体で表現した防衛との考え方も示された。

また高橋新吉や中原中也の生涯をたどって、非定型精神病を解釈するところも興味深く、キューラー・ロスの「死にゆく過程」の考え方にモーツァルトのレクイエムを投影させた考え方には説得力があった。中山和彦先生の幼小児期の体験に基づく不安反応や家族のあり方、生活信条なども述べられており、興味深い内容となっている。非定型精神病とカタトニアを明確に鑑別すべきという主張に全面的に賛同できないところもあるが、先生が経験された多くの症例を通して、その生物学的な所見やその病歴の解釈などから、先生の仮説は十分理解できた。

最終章では、非定型精神病とカタトニアの発症を慈恵医科大学伝統の森田正馬の「自然服従」概念と不安と恐怖の発症とを中山先生の生い立ちなどを含めて論じ、副題である拒絶と服従から学ぶということに触れ、治療、健康論まで言及されている。

現在、臨床の場面ではいわゆる緊張病は減少しているが、双極性障害は増加しており、従来診断で非定型精神病と診断される人は増加しているように思われる。非定型精神病とカタトニアを区別することは、予後予測の上でも重要な課題であるので、これからは女性性をも考慮しながら臨床を考えていきたい。

(中村 純)